

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：AA 研共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1：文字学に関する用語・概念の研究」

2019年度第2回研究会

日時：令和元年10月5日（土曜日）午後13時30分より午後17時、10月6日（日曜日）午前8時30分より午後15時

場所：AA研304室

報告者名（所属）

10月5日

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクトの進行状況について」

(On the joint-research project)

今年度の活動計画を説明・検討するとともに、wikiの活用による「術語集」プラットフォームを示した。

2) 荒川慎太郎（AA研所員）

「西夏文字における偏・旁」

(On the radicals of Tangut script)

西夏文字は、字形ではなく造字法、つまり「部首法」を漢字に真似た「疑似漢字」といえる。しかし、西夏文字における「部首」の定義は完全に漢字のそれと一致するものなのか、検討の余地がある。報告では、いくつかの文字例を挙げ、漢字と西夏文字の「部首」の相違を、六書などの造字理論とともに考察した。

3) 永井正勝（AA研共同研究員，東京大学）

「ヒエログリフ研究からみた文字研究術語」

(Some technical terms from the viewpoint of studies of Hieroglyphs)

種々の文字体系を通底して文字のあり方を記述する際に大きな障害となっているのが、文字研究で必須となる学術用語の設定である。報告では、このような問題意識のもと、ヒエログリフの文字記述を核として、形字論、文字素論、表記論、統字論等の用語の検討を行なった。

10月6日

4) 全員

2019年度第3回研究会に関する打ち合わせを行った。

5) 笹原宏之（AA研共同研究員，早稲田大学）

笹原宏之「漢字表記の動態記述-エビに対する鰻，海老，蛭の時代差，地域差，位相差，意味差」

(Dynamic description of Kanji)

文字研究における用語は、文字・符号の構造と機能の有り様や変化に関するもののほか、社会言語学や日本語学等の分野での動態・変異に対する記述においても整備を要する段階にある。日本で「えび」を表記するための漢字を取り上げ、時間、空間、社会、意味などによる具体的なバリエーションと背景の検証を通じてそれらの概念を提示しつつ必要な用語に関する検討を行う。

6) 岡野賢二（AA研共同研究員，東京外国語大学）

「ビルマ碑文研究からみた文字研究術語」

(Some technical terms from the viewpoint of studies of Burmese inscriptions)

現代ビルマ文字を構成する様々な要素について、綴字原理から見た機能を概観し、それらが（主として日本において）どのように認識され、呼ばれてきたかを整理した。さらに碑文ビルマ文字にのみ見られる要素や綴字法、特に碑文ビルマ文字の綴字法に見られる子音連続表記は、現代ビルマ文字の正書法では認められていないものを含め3種類あるが、いずれも現代において民間語源ならぬ民間綴字として用いられていることも紹介した。その中でどういったものを合字 *ligature* と見なすか、その根拠について議論され、また発表者が「綴り *spell*」と呼ぶものは、(通)文字論的には「字」であるといった指摘がなされた。